

平成 26 年度
東京大学附属図書館外部評価報告書

平成 26 年 12 月

東京大学附属図書館

はじめに

東京大学附属図書館は、平成 25 年度に自己点検評価を実施し、平成 26 年度には、これをふまえた外部評価を実施しました。

今回の外部評価では、慶應義塾大学の田村俊作メディアセンター所長、国立情報学研究所の安達淳副所長、東北学院大学の佐藤義則教授、京都大学の引原隆士図書館機構長、コペンハーゲン大学図書館の Charlotte Rohde 館長顧問の 5 氏に委員をお願いし（肩書きは委員委嘱当時）、予め送付した自己点検評価報告書や各種資料のご検討をいただいた上で、平成 26 年 8 月 25 日に、実地視察とヒアリングを行っていただきました。本報告書は、このような活動をふまえてまとめられたものです。

報告書は、「連絡調整された分散主義」から「共働する一つのシステムへ」という、現在、東京大学附属図書館がめざしている方向性について、「基本的に現在の状況に相応しい」とし、その実現に向けた歩みが「着々と前進している」と評価しつつも、その「実現は未だ道半ばであり、学内各部門のニーズに応えつつ、資源の有効な配分と運用を十全に行うには至っていない」と厳しく指摘し、この改革が「全国の大学図書館に与える影響を考えると、その成果に対する期待は非常に大きい」と、東京大学附属図書館を叱咤激励する内容となっています。

加えて報告書では、「電子書籍が貧弱でほとんど役割を果たしていないことについては、海外の図書館関係者が一様に驚きをみせている」、「研究倫理に関しても研究活動歴の電子的保存などの新規課題も俎上に上がりそうである」など、国際的に見た場合の問題や、大学図書館の新しい課題に関しても、随所に貴重なご指摘をいただいております。

東京大学附属図書館は、現在進行中の新図書館計画をはじめとする、今後の活動の中に、今回の外部評価報告書に盛り込まれている提言を、積極的に生かしていきたいと考えております。

改めて、ご多忙にも関わらず外部評価委員をお引き受けいただき、貴重な報告書を作成していただいた皆様に、心から御礼申し上げます。

平成 26 年 12 月

東京大学附属図書館長 古田元夫

目 次

はじめに

1. 評価・提言	1
2. 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価委員会委員	8
3. 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価委員会	9
(1) 外部評価委員会	9
(2) プレゼンテーション資料	11
・東京大学附属図書館の現状と課題	11
・駒場図書館の概要	26
・柏図書館の現状と今後の課題	35
(3) 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価実施要領	45
4. 平成 25 年度東京大学附属図書館自己点検評価報告書（平成 19 年度～24 年度） 要約	46

1. 評価・提言

I. 概評

東京大学附属図書館は、研究・教育の長い伝統に裏付けられた、わが国最高レベルの知の拠点である東京大学における学術情報提供の基盤として、変化する環境に適応し、より効果的・効率的な運営をめざして、着実に前進している。

東京大学の理念と目標を定めた東京大学憲章を受けて、附属図書館は2005年に東京大学附属図書館憲章を定めている。その中で、附属図書館は自らの役割を、学内における「学習、教育及び研究活動を支える学術情報基盤」と規定している。さらに対外的な貢献について、日本国内に対しては「わが国における学知の収集、保存及び発信の中心の一つとして、全国の学術研究基盤の充実に貢献」することをあげ、さらに国際的な貢献について「国際的な連携・協力のセンターとして、世界の学術機関との学術情報交流を行なうことにより、世界の学術コミュニティに奉仕する」と述べている。学内、国内、さらには国際的な観点から見た自らの意義を良く理解した規定というべきである。

東京大学は大学憲章に基づきそのめざす姿を具体化するために、行動シナリオを作成している。その中で附属図書館は、電子ジャーナルの安定的確保や資料のデジタル化により学術の多様性の確保と卓越性の追求に資すると共に、学習環境の整備に努めて能動的学習を支援することにより「タフな東大生」づくりに貢献することが求められている。

このようにして附属図書館は学内、国内、国際的な自らの役割を明確化すると共に、その実質化のために、2003年に中期目標・中期計画を定め、その実施に努めてきた。

附属図書館運営の基本的な方向は、「連絡調整された分散主義」から「共働する一つのシステム」への転換あるいは展開として説明されている。「連絡調整された分散主義」は1960年代に実施されたいわゆる岸本改革の結果確立された組織原理で、学内に分散する図書館間の連絡調整を図りつつ、学内全体のサービス体制の最適化めざす、というものである。しかし、このような体制は図書等の資料も目録や貸出等のアクセス・提供サービスも紙ベースで行われていた時代に有効なもので、目録作業を始めとして図書館業務が電子化され、電子ジャーナル等資料も電子的に提供される今日の時代には、ネットワークを活用して、目録作業や図書館資料へのアクセス等の基盤的業務を共通のプラットフォームで一元的に運用することにより、利用者の利便性の向上と大きな効率性とを達成することができる。

「共働する一つのシステム」の組織原理のもとで、附属図書館は、主として学習支援機能を担うキャンパス拠点図書館と、主として研究支援機能を担う部局図書館とが、各館の役割に応じた活動を行いつつ、図書館資料の運用について協力すること等、一つのシステムとしての統一的運用を拡充・強化することにより、附属図書館全体の運営をより効果的・効率的に行うことができるようになる。さらに、時代に即応した新たなサービスを効率的に展開することにより、学術の多様性の確保と卓越性の追求、および、「タフな東大生」の育成、という東京大学のめざす姿により貢献できる運営が可能になる。こうした展望を開くものとして、外部評価委員会は「共働する一つのシステム」という組織原理を支持する。

東京大学附属図書館の近年の歩みを「共働する一つのシステム」の実現に向けた歩みとして見るならば、着々と前進していると評価することができる。その詳細は「II. 個別評価」に譲るが、主立ったものを挙げるならば、①基盤的学術情報整備のための全学共通経費システムの構築と、それによる研究支援機能の強化、②学習用図書費の恒常的な予算措置及びキャンパス拠点図書館を中心とした学習支援機能の強化、などがある。

しかし、「一つのシステム」実現は未だ道半ばであり、学内各部門のニーズに応えつつ、資源の有効な配分と運用を十全に行うには至っていない。新図書館という巨大な共用施設の開館が目前に迫る中で、その効果を最大化すべく、改革は急務であると考えられる。図書行政商議会の適正なガバナンスが期待される。

かつての岸本改革は、今日では、全国の大学図書館を、単なる資料の保管庫から、研究・教育を支援するサービス組織へと変える契機となったと評価されている。「共働する一つのシステム」という組織原理と新図書館建設を軸とする現在の東京大学附属図書館の「改革」が全国の大学図書館に与える影響を考えると、その成果に対する期待は非常に大きいものがあることを銘記していただきたい。

II. 個別評価

1. 附属図書館のあり方

「I. 概評」で述べたように、「共働する一つのシステム」というコンセプトでの取り組みは、基本的に現在の状況に相応しいと、外部評価委員会は評価している。このコンセプトは、大規模大学で歴史的に多くの図書館・図書室を持つ大学の目指すべき方向であり達成目標である。その中で教育に関することは、各キャンパスで主体となる学生が専攻分野や学年等多様であり、ニーズも異なる一方、駒場と本郷のように教育面で相互に関連もすることから、各キャンパス拠点図書館を単に横並びに並列的に運用するのではなく、緊密な共働がなされていくことが期待される。

一方で、部局図書館においては研究者の要求を満たす定常的なサービスが不可欠であり、予算面、人員面で研究・教育両面のバランスをどのようにとるのが適切か、部局図書館職員の職務内容を附属図書館全体で調整し、効率的な運用を図るにはどのようにすれば良いか、さらなる検討が急務である。東京大学として次世代の図書館のあり方を示すことがわが国の大学図書館の見本となることを意識し、さまざまな大学、学生、予算規模における可能性をも提示することを望みたい。

さらに、情報の電子化が進む中で、電子コンテンツ拡大のもとでの物理的に存在する「図書館」機能の再定義が必要である。わが国随一の研究図書館として、大学のミッションと密接につながる図書館機能を他の大学等へ範として示してほしい。継続的に本郷、駒場、柏で新しい施設の整備を進める中で、図書館機能の再定義について一つずつ具体例と解を出してきている点は評価したい。例えば、駒場図書館には「ラーニングコモンズ」はないが、他の関連施設と連携してその機能を果たす方針が打ち出されている。すべての機能を附属図書館内部で実現するのではなく、多様な機能と施設を持つ大規模大学の利点を活用し、大学内外の関連施設や活動とうまく連携することにより、実質的に図書館機能を学生・研究者に還元できるように工夫できるのではないかと。物理およびサイバー両面において図書館は教育研究活動の環境作りのコーディネータになり得る。一人で静かに勉強するという従来の図書館機能を維持しつつ、教育も含むコミュニケーションの場としての図書館機能の一つ一つ実現していくことにより、再定義ができていくのではないだろうか。

また、ネットワーク上の電子的情報資源の利用がますます増大する中では国内・国外との関連組織との連携のより一層の強化を含め、附属図書館の中核的機能のさらなる充実が必要になると考えられる。

2. 附属図書館の機能

(1) 学習支援機能

a. 図書館室の運営（開館時間、入館者、図書館間の連携等）

開館時間の延長等、適切な運営上の努力が行われていると評価できる。特に、開館時間の延長は大変結構であり、利用者からも歓迎されているように見えるが、利用者アンケートによりさらに確認するのが良いだろう。拠点図書館は、利用者の特徴に合わせて開館時間を調整しているが、ラーニングコモンズ機能を拡大する流れの中で、その時間枠の拡大を検討すると共に、懸念される課題（もっと図書館を使いたいなど）に早めに対応策を考えていただきたい。

入館者数や貸出数は概ね横ばいであるが、アンケート調査を見ると、予想以上に多くの学生が来館利用しており、その満足度も高い。その利用の仕方の基本は、思ったほど昔と比べて変化しておらず、まずは静かな環境で集中して読書、執筆ということが中心である。その際にWiFiやWebからの情報入手などサイバー機能も併せて使うなど、新たに出現したあらゆる方法で情報を入手するという姿が想像される。新図書館計画において指向されている多様なスタイルの学習環境の実現はこうした状況に相応しい。併せて、かならずしも入館者数や貸出数が図書館の活動の評価ではないと考えられるため、利用を評価する他の指標を検討すべきであろう。

「共働する一つのシステム」の実現に向けた、学内配送、文献デリバリ、ASKサービスなどの連携の動きは高く評価される。この動きをさらに前進・強化するために、キャンパス拠点図書館および部局図書館間の資料搬送サービスを拡充すべきである。一方、他館からの借受資料数の少なさに驚いた。これは附属図書館の蔵書が十分であることを示しているのかも知れないが、また、他館からの取り寄せが高過ぎたり煩わしすぎたりしていることを意味しているのかも知れない。e-DDSは大変良い取り組みであり、他大学の図書館に拡張してゆくことができるのではないだろうか。

b. 学習用図書の整備

学習基盤経費により安定的に学習用図書が購入されている点は、教育支援の観点からも「共働する一つのシステム」という観点からも大いに評価できる。また、キャンパス間のデリバリ、ILL、e-DDS、ASKサービスもこれらを補完するサービスとして評価できる。今後は、国際化の進展を考慮して日本語を母語としない学生に対する学習用図書の充実も望まれる。

教養教育をきちんと維持している数少ない大学として、そのポリシーとうまく整合するように、すなわち図書館だけの方針ではなく大学ないしは教養教育ポリシーとして、学生用図書の充実をさらに図っていただきたい。本郷ではやはり部局の論理が強いと思われるので、能動的学習の充実等の展開を見ながら、例えば、文科系にやや重点を置くなど、収集方針を微調整しながら一層の充実を期待したい。また、学習用図書に限らないが、図書の購入については各キャンパス・部局のニーズに十分に配慮しつつ、全学的な調整のしくみを検討することが、予算の効率的な執行という観点から望まれよう。

c. 教育とのかかわり

図書館ガイダンスや講習会等に積極的に取り組むと共に、シラバスの調査や図書の推薦等も行い、学生のニーズに即したサービスを提供しようと努力している点は大いに評価できる。今後はさらに、各分野の教員とのコミュニケーションを増す努力により、教員側のニーズやアイデアを常に汲み取り、授業内容と連動した電子書籍の整備と提供等、教育を担当する教員およ

び教員組織とのより緊密な関係を構築することが重要であろう。駒場の基礎演習で教員との連携を図っているのは大変良いことであり、さらにライティングサポート等を行うことにより、教員との連携を一層具体的・効果的に展開できるのではないかと。

学習基盤経費はあるものの、サービスに関しては、ネットワークとして存在する附属図書館が全体として教育に関与するというよりは、各図書館室が個別に提供するサービスの積み上げとなっているのみである。そのため、単なる総和でしかない事業を附属図書館の事業として評価することが適切であるようには思えない。附属図書館が一つのシステムとして学内情報資源のインフラとなることを目指すのであれば、学生証のみで学内のどの図書館室にも自由に入出りでき、どこからでも借りられ、どこにでも返せるような体制が、利用者の利便性の点でも運用コストの点でも望ましい。実現がいかにかに困難かは理解できるが、一層の努力を望みたい。

(2) 研究支援機能

a. 電子リソース（電子ジャーナル、データベース）の整備

年々値上がりするパッケージ契約の財源確保は大きな課題だが、東京大学が必要な財源を全学共通経費化し、複数年度に渡って安定的な財源計画を立てている点は大変優れている。しかしながら、現方式も、運営費削減の中で、いずれその共通経費を支払うことができない部局が現れた時点で崩壊する。そのことが附属図書館の将来計画にどのような影響があるかを予め検討しておくことは避けられない。見直し期間が適切かなどの検討も重要と考えられる。

また、これはそもそも一大学では解決できない課題であり、日本を代表する研究大学として解決に向けリーダーシップを取ることを期待したい。今までの JUSTICE での貢献は特筆すべきだが、課題はますます難しくなっている。国際連携も重要である。ぜひ職員をそのような活動にも加わるよう支援していただきたい。

アクセス可能な電子ジャーナルとデータベースの数は世界各国の大規模大学図書館に比べても遜色がない。一方、電子書籍が貧弱でほとんど役割を果たしていないことについては、海外の図書館関係者が一様に驚きを見せている。著作権法等制度上の制約があるため、電子書籍形態での学習教材や学術書の出版はわが国で極めて不十分で、わが国の学術情報の流通上、ひいては教育研究上の大きな問題となっている。これについても積極的な発言と他大学を巻き込んだ活動を期待したい。

b. 附属図書館による研究支援のあり方

電子リソースの整備と機関リポジトリ充実による組織的情報発信を持続的に行っている点は評価できる。また、電子リソースが整備され、利用が着実に伸びている。財源の確保等が切実な課題であるとの認識はまさに適切であるが、ダウンロード単価等から見たコストパフォーマンスが他大学に比べ高いこと等のプラスの側面をもっとアピールしても良い。

JUSTICE の活動を通じた全国的な研究支援も高く評価できる。今後共、東京大学に留まらず全国の大学図書館に指導的な支援を続けていくことが期待される。

今後は、研究に関してもコンテンツ絡みの課題がいろいろと出てくることが予想される。例えば、研究倫理に関して研究活動履歴の電子的保持などの新規課題も俎上に上がりそうである。必ずしも図書館の仕事とは認識されていないこのような新しい課題に対しても、図書館としての役割を踏まえて、他部門、特に研究支援部門との連携により、学術情報に関わる多面的な支援の方策を探り、試行的に取り組んでいただきたい。また、そうした新しい課題に積極的に取り組む職員の能力開発も必要であろう。

(3) 保存・情報発信機能

a. 図書の収容能力

柏図書館、総合図書館における自動化書庫の導入および整備計画によって、今後かなりの収容能力が確保されることが十分に期待でき、書庫整備計画は高く評価できる。むしろ課題は現在資料があまりに分散していることで、新図書館計画の実現が待たれるし、学内各部門の協力を期待したい。

総合図書館は貴重な建物ではあるが、老朽化していることを今回つぶさに認識した。新図書館はタイミングがよく進められ大変良いことであるが、保存の問題を根本的に解決するものではない。他キャンパスの利用なども含め、わが国の大学図書館全体の資料保存の課題として、継続的かつ組織的に将来計画を検討いただきたい。

b. 資料のデジタル化

貴重なコレクションを有する国内屈指の図書館として見た場合、資料のデジタル化は積極的に取り組まれているとは言い難い。しかし、新図書館計画においてデジタル・プロジェクトの推進が予定されており、課題の認識と今後の展望は適切であると評価できる。

とりわけ重要なのは大学内で生産される情報の電子化を拡大することである。最大の問題は著作権で、処理に要する手間とコストのために、教育や研究への活用が難しくなっている。JUSTICE等において他大学と連携して事態を打開することが望まれる。

また、日本語の大学レベルの教科書をどのように電子化し活用するか、あるいはできるのかが喫緊の課題である。東京大学のグローバル化を考える上でも日本語の教科書にどの程度こだわるかは重要な課題であろう。

諸外国で急速に普及してきているオンデマンドでの資料のデジタル化サービスは利用者のニーズが大きい。著作権法等制度上の壁によりわが国では現在は不可能であるが、これについても他大学と連携して一刻も早く課題を解決し、サービスを実現することが望まれる。

c. 機関リポジトリの登録コンテンツの運用

論文に類する情報の電子化では、どのように組織的かつ継続的に行うかが課題であるが、それ以外のデータや教育関係の情報（教材等）については、まだ方向性が定まっていない。図書館の活動としては、前者についてしっかり実施し発展させることがまず重要である。

その点、論文については3万件を超すコンテンツ件数を有し、また利用（ダウンロード）件数も多く、一定の成果をあげていると評価できる。なお、自己点検評価報告書で言及されているように、今後はさらに多くの分野の研究成果を登録するとともに、特徴的なコンテンツの存在をより積極的に広報する等、一層の進展を期待したい。

一方、データ等については試行的活動を教員と連携して行う中で、実現可能な方策を考えていくということによいのではないか。ここにおいても、国際動向の注視と他大学との連携を図ることが必要であろう。

また、機関リポジトリは東京大学としての社会貢献という面も併せ持つため、研究資料も含めたコンテンツのオープン化に先鞭をつけてほしい。

(4) 社会貢献・社会連携

a. イベント・催し

特別展示，記念講演会の開催や，柏図書館におけるさまざまなイベント開催等の積極的な取り組みは，社会一般の東京大学に対する理解の促進に貢献できていると評価する。駒場図書館でも，学生団体などと連携したイベントなどの取り組みが望まれる。

総合図書館はイベント等に相応しい風格を持っている。「友の会」活動なども図書館のファンを一人でも増やせればよいという観点で進めればよいのではないか。寄付活動もファンに応えるには何をすればよいかを考えるよいきっかけになると考える。

イベントに取り組む姿勢として，東京大学としては，地域貢献ではなく日本全国への貢献として捉えてほしい。また，本来の学生や教員に対するサービス性向上が最優先事項であることには留意いただきたい。

b. 附属図書館による社会連携のあり方

多様な機会を捉えて図書館が持つ学術情報資源を社会に開いていくことには意義がある。図書館としての機能がその時点の要請に沿って十分に発揮されていれば，自ずと社会連携の具体的な事例が出てくる筈である。図書館の諸課題に取り組む過程で社会連携も必要になったり求められたりする筈である。

現在でも活発な取り組みが試みられていると評価できる。最大のミッションである教育，研究支援の支障とならない範囲で，市民参加型の社会連携事業には積極的に取り組むべきであろう。

(5) 組織・運営

a. 組織のあり方

自己点検評価報告書に述べられている「附属図書館がこれまで以上のパフォーマンスを維持・向上させるには，図書館室の統合あるいはサービスポイントの集約を視野に入れた組織・運営の見直しが強く求められる」(p. 38) という認識を支持する。過去の歴史的な経緯を踏まえて，新しいシステム構築の方向が打ち出されていることは高く評価できる。その上で，古典的な図書室運用を求める部局図書館に対してどのような協力を求めるかという点を明確にすることが望まれる。また，収集，整理・検索，貸出，保存等の基盤的業務についても，全学資料購入集中処理等の活動を評価しつつ，一層の集約を望みたい。

図書館に関係する困難な課題に対しては，現在の職員数をなるべく減らさず，より新しいスキルを持った人材ないしは好奇心のある人材に入ってもらうように努力することが肝要である。部局が多いので，全学的調整機能は商議会に一本化し，個々の運営上の課題に対しては，機動的に動けるワーキンググループで案を作るのが良いのではないか。そのためにも，サポートしてくれる教員をなるべく多く確保することが重要であろう。

b. 職員：専門性を有する図書館職員の育成と確保のための方策

「自己点検評価報告書」では図書館室の分散に対する図書館職員の業務の定量的な評価がなされており，現状は良く把握できる。同報告書が述べているように，人員が削減される一方で，職員の所属の分散による業務の重複が非効率を生みだしているため，重複を解消し，時機に応じた人員の適正な配置が可能となるような制度的措置が早急に求められる。

一方養成については，国立大学図書館協会の会長館として，職員能力向上のための事業に

取り組んでいる点は評価できる。ただし、今後において現状のパフォーマンスを維持，向上させると同時に，新たな課題に対しより専門的なスキルの確保が求められる中では，専門的職員の処遇等の人事制度のあり方についても見直しが求められるのではないかと。

図書館職員は良く勉強する人が多い一方で，新しいことにはトライしない面が見られる。具体的な新しい課題に取り組ませること，特にグローバルに活動するという方向でチャレンジさせるということ，また，部局図書館の職員をキャンパス拠点図書館を通じてチャレンジさせること等が必要である。全学的な集中処理など，全学に渡る活動を増やす中で，大学内での協働と人事交流を活発化させることが大切であろう。研究支援部門や情報処理部門など学内関連部門との人事交流も検討されて良い。

c. 予算：全学的な予算と部局予算とのバランスのあり方

基盤的学術雑誌コレクション確保のための全学共通図書予算の確保等，現状の取り組みは適切なバランスが取られていると判断できる。

将来的には，電子化が一層進展し，電子書籍の導入が進展することや，恒常的な値上げ，円安，消費税等の問題の深刻化が予想されることから，全学の経費の一部を一定の割合で基盤的経費として確保すること，利用実績に基づく負担配分方法の採用等も検討して良いだろう。

また業務の集中化を一層推進することを通じてより効率的な運営をめざし，それが部局における定員や予算の削減にならないように注意しながら，新しい課題にチャレンジできる予算と要員を確保することも重要である。

3. 新図書館への期待

新図書館構想が具体的に進んでいることは大変喜ばしい。本郷の重厚な総合図書館と，駒場や柏のモダンなキャンパス拠点図書館の対照の中に，一貫した東京大学としての「共働する一つのシステム」として，教育と研究のための新しい図書館像が実現することを期待している。

そのためにはまず，大学組織の中で支援組織としての附属図書館の位置づけを明確にし，全学の図書館室が有機的に協力・連携する体制を築き，附属図書館が全体として機能を高めようとする中に，新図書館構想をしっかりと位置づけることが必要であろう。さらに，機能を高めるにはまずもって人材が重要であることも付言しておく。

これからは，世界をリードする大学として相応しい図書館活動をするのがますます求められるであろう。欧米の類似のランクの大学での図書館活動と比較し，附属図書館に欠ける点を大学上層部にきちんと訴えかけ続けるということも大切である。

2. 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価委員会委員

(五十音順)

委員長 田 村 俊 作	慶應義塾大学メディアセンター所長
安 達 淳	国立情報学研究所副所長・学術基盤推進部長
佐 藤 義 則	東北学院大学文学部教授
引 原 隆 士	京都大学図書館機構長・附属図書館長
Charlotte Rohde	コペンハーゲン大学図書館館長顧問

3. 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価委員会

(1) 外部評価委員会

- 1) 日 時：平成 26 年 8 月 25 日（月）10:00～17:00
- 2) 場 所：東京大学駒場図書館、総合図書館第大会議室
- 3) 出席者：(外部評価委員)

田 村 俊 作 (委員長)

安 達 淳

佐 藤 義 則

引 原 隆 士

Charlotte Rohde

(東京大学附属図書館)

古 田 元 夫 附属図書館長

石 田 英 敬 附属図書館副館長

酒 井 哲 哉 駒場図書館長

雨 宮 慶 幸 柏図書館長

関 川 雅 彦 附属図書館事務部長

木 下 聡 附属図書館総務課長

熊 渕 智 行 附属図書館情報管理課長

岡 部 幸 祐 附属図書館情報サービス課長

市 村 櫻 子 附属図書館柏地区図書課長

増 田 晃 一 教養学部等図書課長

4) 日 程：

- | | |
|-------------|---------------------------|
| 10:00 | 集合（駒場図書館・地階会議室） |
| 10:00～11:00 | 駒場図書館実地視察 |
| 11:00～11:45 | 駒場キャンパスから本郷キャンパスへ移動（タクシー） |
| 11:45～13:00 | 昼食（伊藤国際学術研究センター） |
| 13:00～13:20 | 部局図書館室実地視察（明治新聞雑誌文庫） |
| 13:20～13:30 | 委員会開会（総合図書館・大会議室） |
| | 委員長選出 |
| | 資料確認 |
| 13:30～14:15 | 総合図書館実地視察 |
| 14:15～14:35 | 柏図書館の紹介 |
| 14:35～15:30 | 附属図書館の現状と課題 |
| 15:30～15:45 | 休憩 |
| 15:45～16:10 | 外部評価委員ヒアリング打合せ |

16:10～17:05	外部評価委員ヒアリング
17:05～17:25	外部評価委員評価のとりまとめ打合せ 今後の予定の確認等
17:30	閉会

5) 配付資料 :

- ① 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価委員会日程
- ② 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価実施要領
- ③ 東京大学附属図書館外部評価委員会委員
- ④ 東京大学の概要 2014 Guidebook
- ⑤ 東京大学の概要 2014 Databook 資料編
- ⑥ The University of Tokyo 2014-15
- ⑦ 東京大学の行動シナリオ FOREST 2015
- ⑧ 学内広報 no.1443 学部教育の総合的改革
- ⑨ 東京大学柏キャンパスへようこそ
- ⑩ 附属図書館の現状と課題
- ⑪ 駒場図書館の概要 ※駒場図書館で配付
- ⑫ 柏図書館の現状と今後の課題

【事前配付資料】

- ⑬ 平成 25 年度東京大学附属図書館自己点検評価報告書
(平成 19 年度～24 年度)
- ⑭ 平成 25 年度東京大学附属図書館自己点検評価報告書 要約
- ⑮ 東京大学附属図書館概要 2013/2014
- ⑯ University of Tokyo Library System 2011/2012
- ⑰ 東京大学附属図書館 図書館利用ガイド 2014
- ⑱ Guide to UTokyo Libraries 2014
- ⑲ 東京大学駒場図書館 (リーフレット)
- ⑳ 東京大学柏図書館 (リーフレット)
- ㉑ 図書館の窓 (最新号)
- ㉒ 東京大学新図書館計画アカデミック・コモンズ
- ㉓ 東京大学における知識基盤の整備のあり方について

**東京大学附属図書館の
現状と課題**
Current Status and Issues of the University
of Tokyo Library System

東京大学附属図書館 館長 古田 元夫
副館長 石田 英敬

東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

報告の内容 Contents

▶ 14:10～15:00

1. 東京大学附属図書館の現状 Current Status of the University of Tokyo Library System
2. 今後の課題 Future Issues
3. 新図書館計画 New Library Plan
4. 質疑応答 Questions and Answers

東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25 1

東京大学の概要

About the University of Tokyo (Utokyo)

- ▶ 東京大学憲章 The Charter of UTokyo
 - (学術情報と情報公開) 東京大学は、図書館等の情報関連施設を全学的視点で整備し、...
- ▶ 組織 Organization
 - 本郷、駒場、柏の3キャンパスを中心に10学部15研究科
 - 構成員 38,000人
 - ・ 教職員 10,000人(有期雇用職員を含む)
 - ・ 学生 28,000人(学部生約14,000人+大学院生14,000人)
- ▶ 財政規模 Finances
 - 総額 2,300億円

(平成26年5月現在)

東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

2

東京大学の行動シナリオ

Action scenario of UTokyo: FOREST2015

- ▶ 重点テーマ別行動シナリオ(全学横断的な9テーマ)
Action Scenarios for Priority Areas
 1. 学術の多様性の確保と卓越性の追求
 2. グローバル・キャンパスの形成
 3. 社会連携の展開と挑戦—「知の還元」から「知の共創」へ
 4. 「タフな東大生」の育成
 5. 教員の教育力の向上、活力の維持
 6. プロフェッショナルとしての職員の養成
 7. 卒業生との緊密なネットワークの形成
 8. 経営の機動性向上と基盤強化
 9. ガバナンス、コンプライアンスの強化

東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

3

重点テーマ別行動シナリオ

From action scenarios for priority areas

- ▶ 1. 学術の多様性の確保と卓越性の追求
 - 卓越した研究を行うためのインフラ整備
 - ・ 国公立大学の連携等による学術雑誌・電子ジャーナルの安定的確保
 - ・ 資料庫の整備、原典資料のデジタル化

- ▶ 4. 「タフな東大生」の育成
 - レイト・スペシャリゼーションの実質化と教育システムの改善
 - ・ 自習室や図書館等学習環境の整備による能動的学習の支援

附属図書館の行動シナリオ

Action scenarios of library

- ▶ 部局別行動シナリオ
 - 新図書館計画の推進
 - キャンパス拠点図書館及び部局図書館の学習環境の整備
 - 基盤的な学術雑誌等の整備と学術情報流通の改革
 - 図書・貴重書の保存事業と研究成果の発信
 - 全学の図書館室の連携強化による業務の効率化

学部教育の総合的改革

Comprehensive reform of undergraduate education

改革の全体像の
改革の3つの柱

学部教育の総合的改革の3つの柱「国際化」、「実質化」、「高度化」に沿って、秋季入学の拡充・推進を図りつつ、新たな教育プログラムを導入します。

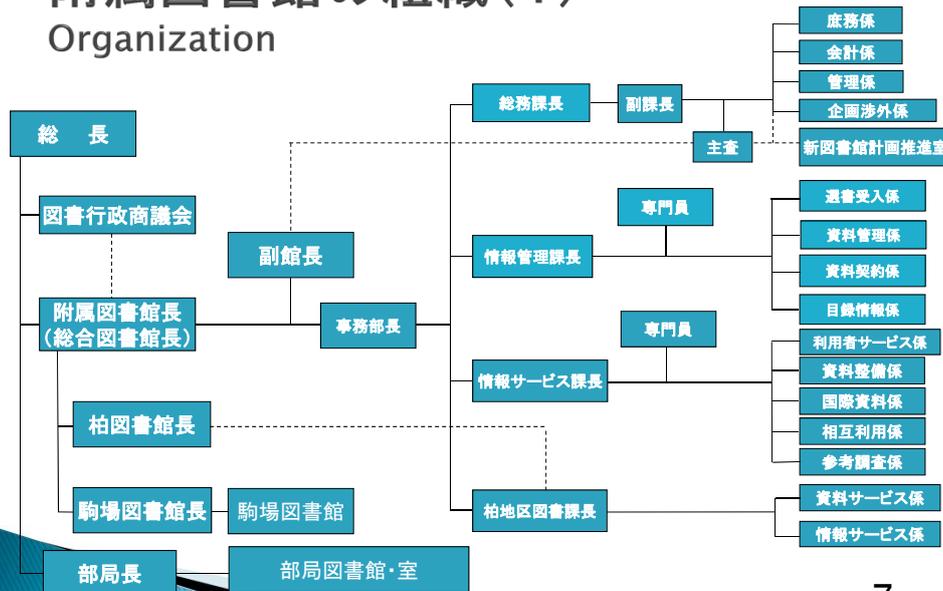


東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

6

附属図書館の組織(1)

Organization



東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

7

附属図書館の組織(2)

Organization

- ▶ 運営原理
 - 「連絡調整された分散主義」から「共働する一つのシステム」へ
- ▶ 意思決定機関
 - 図書行政商議会
 - 附属図書館運営委員会
 - 図書館担当理事
- ▶ 職員数
 - 図書系専任職員 165名（+非常勤職員146名）
（うち総合図書館39名、柏図書館5名）

予算・経費(1)

Budget and expenses

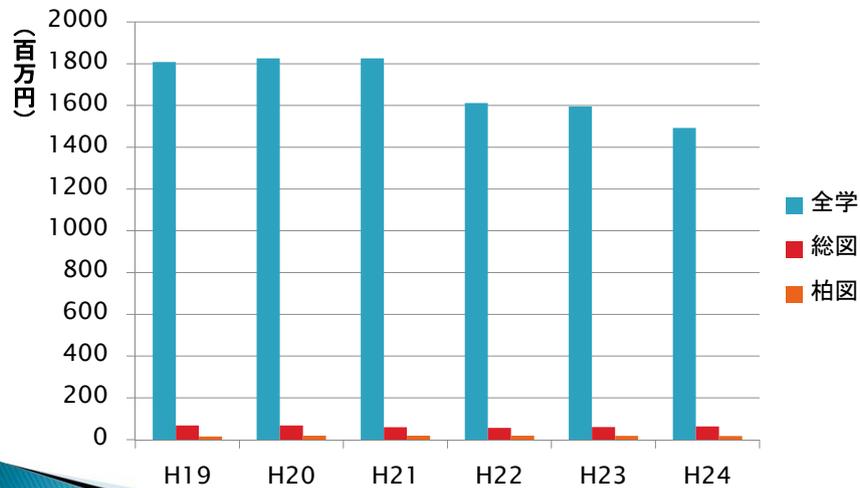
- ▶ 全学図書館運営費：約3億6,000万円

- ▶ 全学資料費：1,492,120千円(約15億円)
 - 総合図書館：63,286千円(4.2%)
 - 柏図書館：17,507千円(1.2%)

- ▶ 全学経費
 - 学生用図書費：50,000千円(5,000万円)
 - 全学共通経費：1,150,000千円(11億5,000万円)

予算・経費(2):資料費

Budget and expenses: Document costs



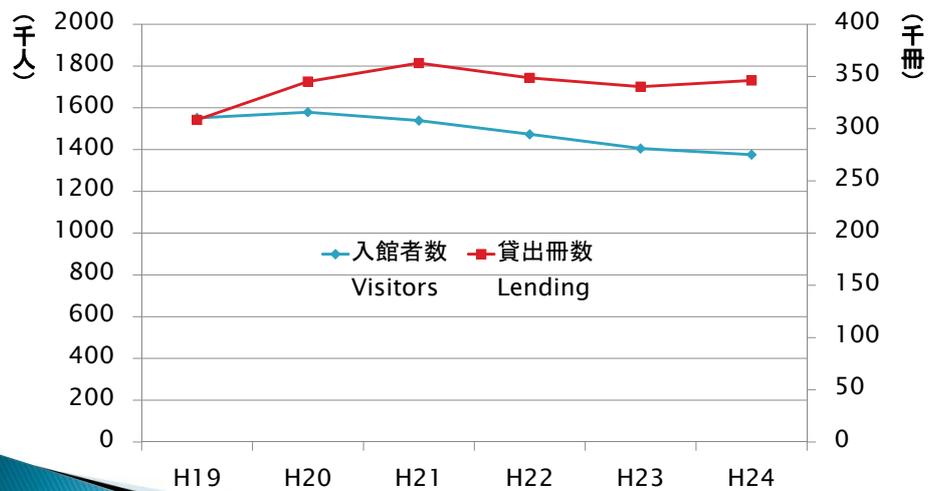
東京大学附属図書館外部評価委員会資料

2014/8/25

10

学習支援機能(1):入館者と貸出

Learning support function: Visitors and lending



東京大学附属図書館外部評価委員会資料

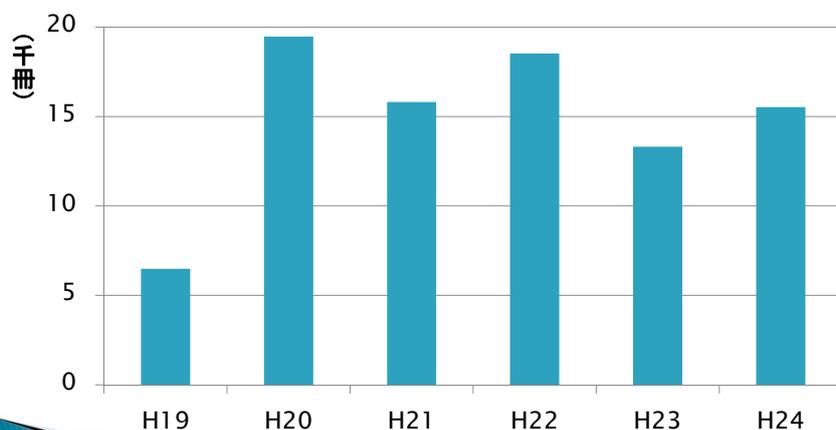
2014/8/25

11

学習支援機能(2):学習用図書

Learning support function: Learning books

学習基盤経費による学習用図書購入数



東京大学附属図書館外部評価委員会資料

2014/8/25

12

学習支援機能(3):情報リテラシー

Learning support function: Information literacy

- ▶ 全学
 - データベース講習会、テーマ別講習会(情報システム部・学術情報リテラシー担当による)
- ▶ 総合図書館
 - 図書館利用案内、館内・書庫案内、蔵書検索入門
- ▶ 駒場図書館
 - 文系1年生必須科目「基礎演習授業」でのツアー・検索実習
 - 学部学生向け図書館ツアー、大学院生向けコース
 - オンデマンド講習会
- ▶ 柏図書館
 - 新領域専攻別ガイダンス、ライブラリーツアー
 - 留学生ガイダンス

東京大学附属図書館外部評価委員会資料

2014/8/25

13

研究支援機能(1)

Research support function

▶ 全学共通経費による資料整備状況

▶ 学術雑誌(冊子)

- 外国雑誌 3,897タイトル
- 国内雑誌 1,814タイトル
- 計 5,711タイトル

● データベース

- 66点

● 大型コレクション(買切り)

- 15点(累積)

▶ 電子ジャーナル

- 外国雑誌 8,704タイトル
- 国内雑誌 25タイトル
- 計 8,729タイトル

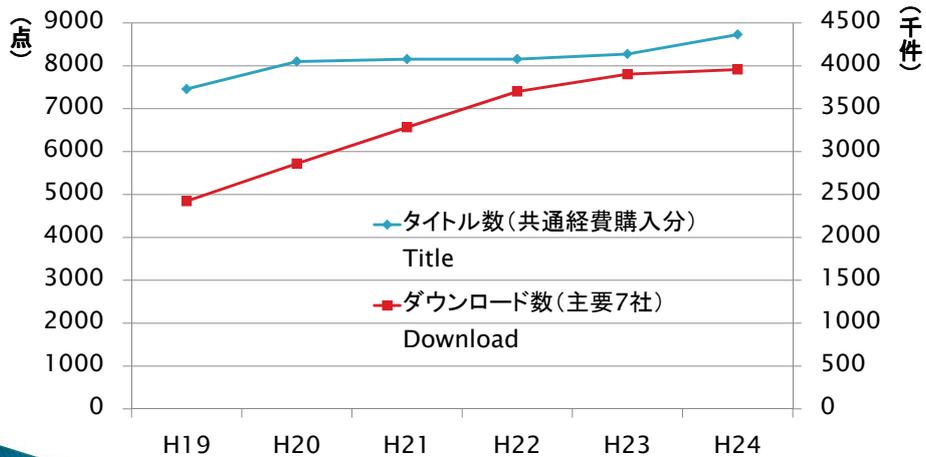
- ・平成24年度実績
- ・共通経費での購入分のみ

東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

14

研究支援機能(2): 電子ジャーナル

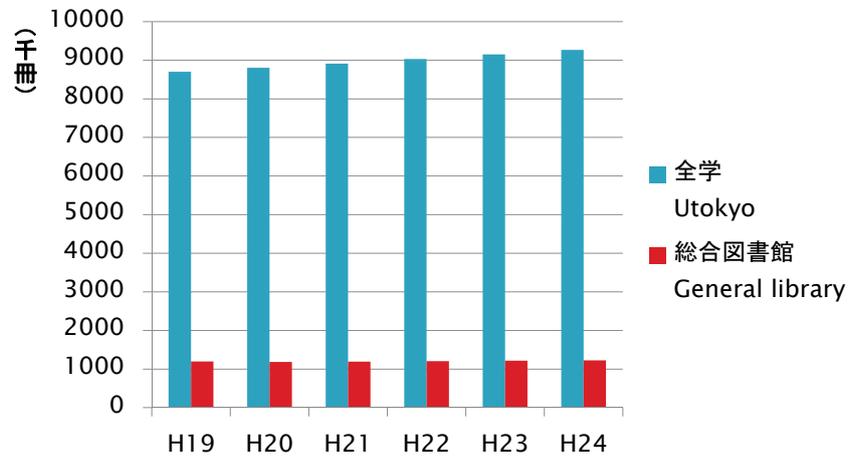
Research support function: EJ



東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

15

保存・情報発信機能(1) : holdings Storage and information dissemination function



東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

16

保存・情報発信機能(2) Storage and information dissemination function

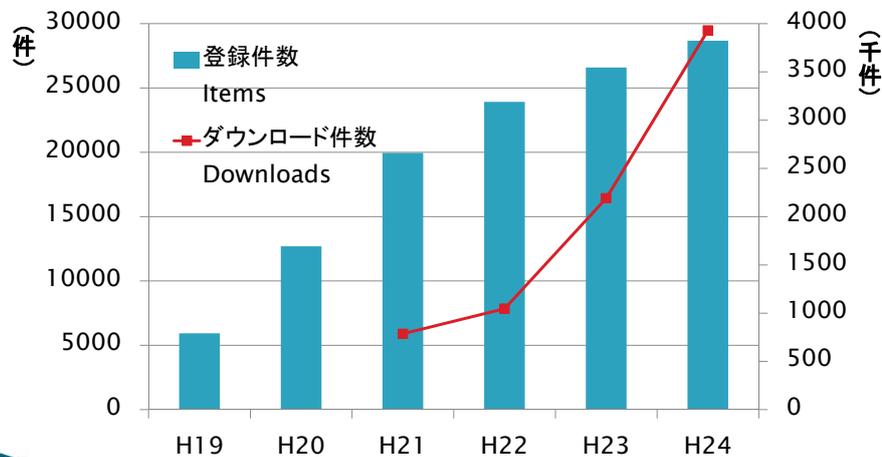
▶ 電子化コレクション digitized collections 28件



東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

17

保存・情報発信機能(3):Repository Storage and information dissemination function



東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

18

社会貢献・社会連携(1)

Social contribution and social cooperation

- ▶ オープンキャンパス
 - 自由見学施設として公開
 - 常設・企画展示によるコレクションの紹介
 - 書庫見学ツアー
- ▶ 催し物
 - 展示、講演会
 - 新図書館計画トークイベント、関連展示
 - わくわくミニコンサート、映画上映会、市立図書館との連携企画(柏図書館)
- ▶ 友の会
 - 柏図書館友の会(平成20年度～):施設利用、催し物
 - 駒場友の会(平成16年3月～):学生用図書費の支援

東京大学附属図書館外部評価委員会資料 2014/8/25

19

社会貢献・社会連携(2)

Social contribution and social cooperation

- ▶ 他の大学図書館との連携・協力
 - 国立大学図書館協会: 会長館・事務局
 - 国公立大学図書館協力委員会: 常任幹事館
 - 大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE): 専任職員の派遣

- ▶ 国際的な連携・協力の推進
 - IARU Librarians Meetingへの参加
 - 海外の大学図書館との提携(ソウル大学校中央図書館)

報告の内容 Contents

- ▶ 14:10~15:00
 1. 東京大学附属図書館の現状 Current Status of the University of Tokyo Library System
 2. 今後の課題 Future Issues
 3. 新図書館計画 New Library Plan
 4. 質疑応答 Questions and Answers

今後の課題(1) Future issues

▶ 附属図書館が共働化しにくい要因

Factors that are difficult for cooperating

- 図書館の全学的な位置づけが曖昧
- 経営組織としての一体化不足
- 職員および予算の減少
- 大学図書館の役割の変化

今後の課題(2) Future issues

▶ 3つのポイント

- コンテンツ提供型図書館への移行
 - ・ 電子的リソースへの対応
 - ・ 図書館のハイブリッド化
- 「場所としての図書館」への対応
- 新図書館計画の実現

報告の内容 Contents

▶ 14:10～15:00

1. 東京大学附属図書館の現状 Current Status of the University of Tokyo Library System
2. 今後の課題 Future Issues
3. **新図書館計画 New Library Plan**
4. 質疑応答 Questions and Answers

新図書館計画の概要

About new library plan

▶ **新館**

- ライブラリープラザ(地下1階)
 - ・ アクティブ・ラーニング、研究発表等
- 自動化書庫(地下2～4階)
 - ・ 300万冊の蔵書を収蔵



▶ **本館**

- アジア研究図書館(4階)
 - ・ 世界最高水準のアジア研究の場
- 閲覧スペースの拡充(3階)
- 電子メディア時代に対応した新しい機能(1～2階)



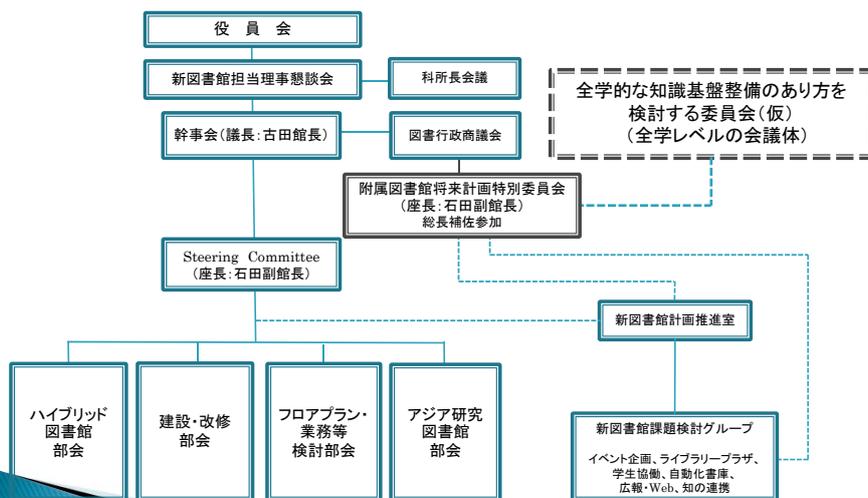
新図書館がめざすもの

The goals of new library plan

- ▶ 電子図書館と伝統的図書館の融合
- ▶ 世界最高水準のアジア研究図書館
- ▶ 教育との連携と国際化への対応
- ▶ 日本の学術文化の世界への発信
- ▶ 出版文化の公共的基盤

計画の推進体制

Promotion system of planning



東京大学の知識基盤整備

Knowledge infrastructure of UTokyo

- ▶ 東京大学における知的基盤整備に関する懇談会を設置（平成25年10月）
- ▶ 「東京大学における知識基盤のあり方について（報告書）」を作成（平成26年3月）
 - 知識基盤整備の課題
 - ・ ニーズの多様化とサービスの個別化
 - ・ 知識支援サービスの連携協働
 - ・ 知識支援サービスの高度化と全学インフラの整備
 - 提言：全学的な知識基盤整備のあり方
 - ・ 「全学知識基盤検討会（仮）」を設置し、全学の知識基盤マネジメントを全学的な視点から検討する

報告の内容 Contents

- ▶ 14:10～15:00
 1. 東京大学附属図書館の現状 Current Status of the University of Tokyo Library System
 2. 今後の課題 Future Issues
 3. 新図書館計画 New Library Plan
 4. 質疑応答 Questions and Answers

駒場図書館の概要

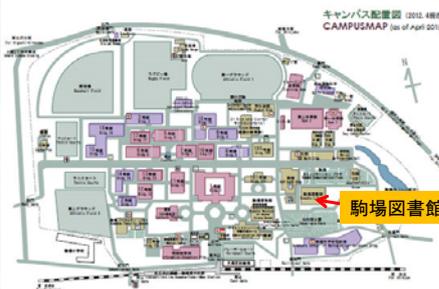
Komaba Library : An Overview



図書館内中央 吹き抜け



図書館前景



1

目次 Contents

- 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部運営の特徴
Key Features of Management at The University of Tokyo's College of Arts and Sciences and Graduate School of Arts and Sciences
- 駒場図書館の位置づけ
Regulations on the Status of the Komaba Library
- 駒場図書館の変遷、駒 I キャンパスの図書館・室
The Transition of the Komaba Library, and Libraries at Komaba I Campus
- 職員体制(教養学部等図書課)
Office Management Structure
- 駒場図書館の現状
The Present Situation of the Library
資料配架、選書体制、予算、経費推移、利用、ILL、ガイダンス・講習会
- 所蔵資料の電子化・公開
Digital Collections
- 国際化・グローバル化対応
Response to Internationalization/ Globalization
- 駒場図書館新館(Ⅱ期棟)計画
A Development Plan for a New Library Building

2

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部運営の特徴

Key Features of Management at The University of Tokyo's College of Arts and Sciences and Graduate School of Arts and Sciences

- 本学の学部教育においては、前期課程の幅広いリベラル・アーツ教育を基礎とし、後期課程の高度な専門教育へ結合する柔軟な教育システムを、大学院においては、さらに多様な専門分野に展開し広範な高度専門教育システムを実現している。
- 全ての学部1、2年生が在籍する前期課程の教育は、諸学部の協力を受けながら、教養学部が主体となって実施している。このため、総合文化研究科・教養学部は、前期課程・後期課程・大学院研究科の3層を一体として部局の運営を行うなど、他の教育研究部局にない特徴を持っている。

大学院

12,465名



学部

後期課程
7,360名



前期課程
6,643名



2014. 5. 1現在 3

駒場図書館の位置づけ Regulations on the Status of the Komaba Library

- 東京大学附属図書館基本規則(平成16年3月16日制定)

第2条 附属図書館は、次の図書館からなる。

- (1) 総合図書館
- (2) 駒場図書館
- (3) 柏図書館
- (4) 部局図書館

(中略)

第7条 駒場キャンパスに、駒場図書館を置く。

- 附属図書館基本規則第2条第4号でいう部局図書館とは次の図書館・室をいう。

1. 東京大学法学部研究室図書室

(中略)

14. 東京大学総合文化研究科図書館

15. 東京大学総合文化研究科自然科学図書室

16. 東京大学総合文化研究科附属グローバル地域研究機構図書室

(後略)

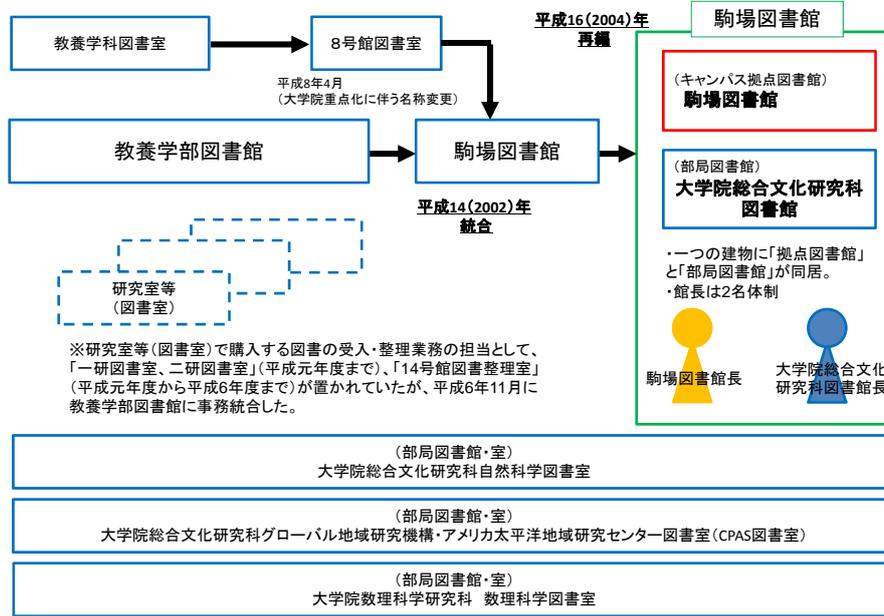
- 東京大学図書館憲章(平成18年3月 総長裁定)

東京大学附属図書館の使命

1. 東京大学附属図書館は、学習支援機能、研究支援機能及び保存機能を併せ持つ。総合図書館、駒場図書館、柏図書館は、(中略)各キャンパスにおける学習支援機能の中心的な担い手となる。

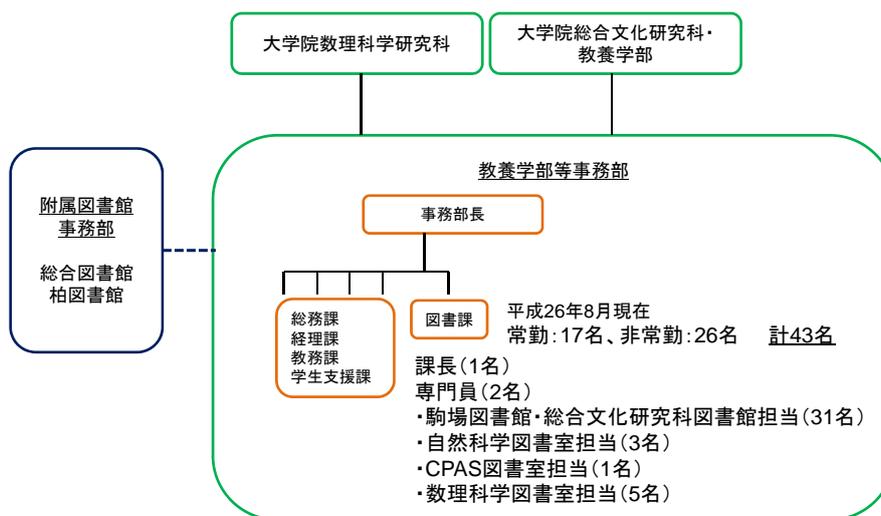
駒場図書館の変遷、駒1キャンパスの図書館・室

The Transition of the Komaba Library, and Libraries at Komaba I Campus.



職員体制(教養学部等図書課)

Office Management Structure



[常勤職員の削減(平成18年度以降):平成19年度1名、平成21年度1名、平成23年度1名、平成26年度1名]

6

駒場図書館の現状(資料配架)

The Present Situation of the Library : Book Holdings



2002年3月竣工 同10月開館
地上4階、地下2階
総床面積: 8,600㎡



保存書庫(旧教養学部図書館書庫棟)
総床面積: 1,050㎡

階	閲覧席	資料数
4階	317	76千冊
3階	310	53千冊
2階	323	31千冊
1階	21	1千冊
地下1階	72	141千冊
地下2階	30	174千冊
小計	1,073	476千冊
保存書庫	0	157千冊
合計	1,073	633千冊

(2014年3月末現在)

計 75万冊収容能力
(現在84%配架率)

学習図書、新着雑誌

研究図書、製本雑誌

— 高旧蔵書、個人文庫等



【特徴】 保存書庫資料及び貴重書は、職員による出納方式だが、駒場図書館内のほぼ全ての資料は、利用者が自分で自由に閲覧できる。

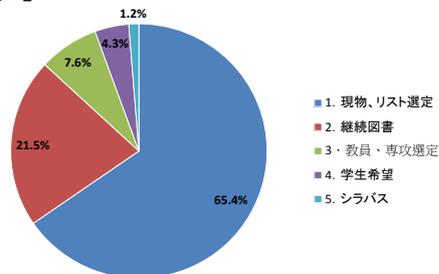
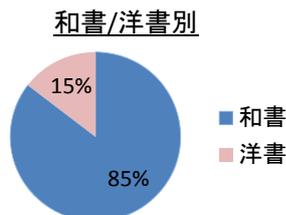
7

駒場図書館の現状(選書体制)

Collection Development

平成25年度購入実績 7,051冊

- 「図書選定特別委員会委員」の教員とジュニア TA学生による、現物及びリストによる選定(+駒場図書館職員による補完選定)【週次】
- 継続図書
- 教員推薦、専攻、学科等選定【随時】
- 学生リクエスト【随時】
- シラバス掲載の参考図書【学期単位】

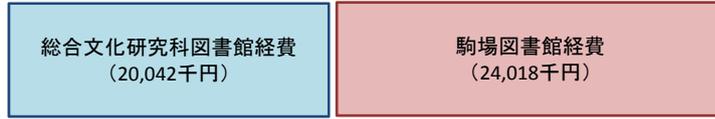


8

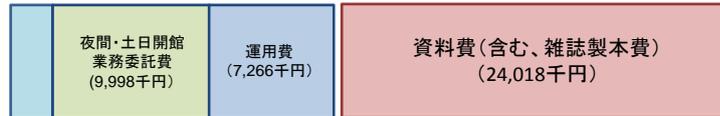
駒場図書館の現状(予算) Budget

【平成26年度予算】

●収入 (計44,060千円)

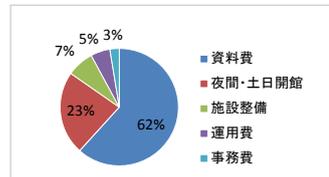


●支出 (計44,060千円)



資料費
(2,778千円)

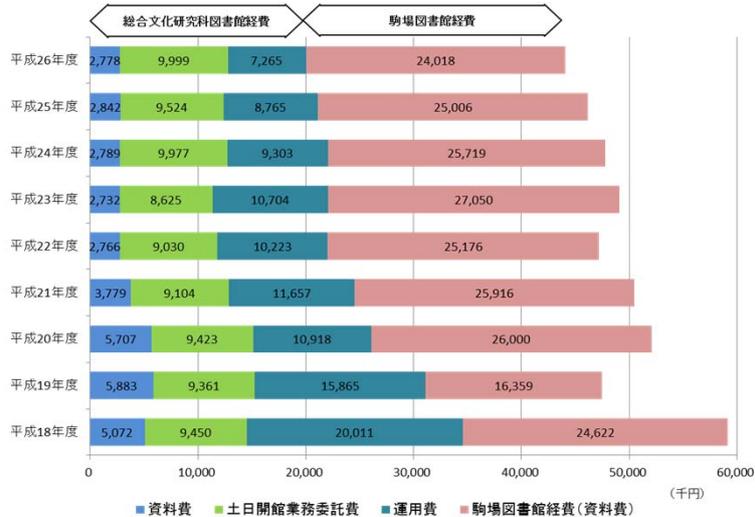
運用費内訳
 ・施設整備費 3,238千円
 ・図書館用消耗品等 2,292千円
 ・事務費 1,114千円
 ・予備費 621千円



9

駒場図書館の現状(経費推移) Transition of Expenses

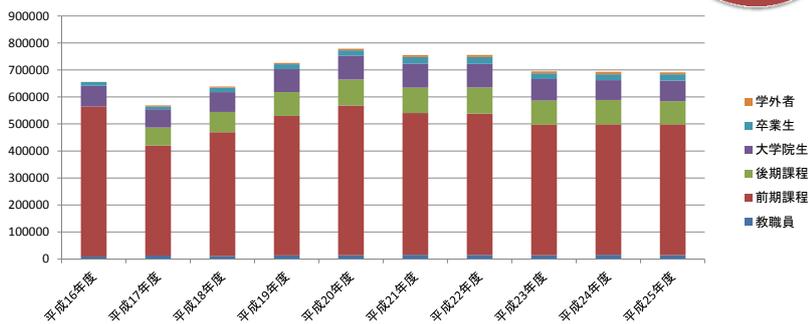
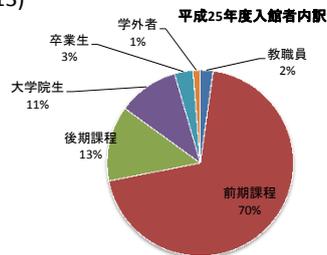
【平成18年度～25年度支出額、ただし平成26年度は予算額】



10

駒場図書館の現状(利用)

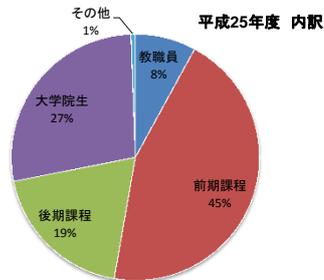
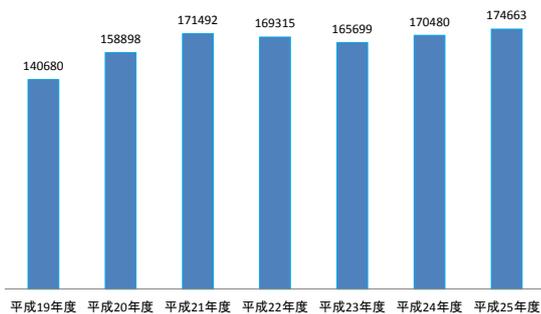
入館者数の推移(平成16年度～平成25年度)
Library Visits (2004-2013)



11

駒場図書館の現状(利用)

貸出冊数の推移(平成19年度～平成25年度)
Circulation (2007-2013)



12

駒場図書館の現状 (ILL) ILL (2007-2013)



●ILL(InterLibrary Loan)の実績

<学外機関(含む海外)>

	平成19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
図書の貸出:	259冊	349冊	310冊	389冊	360冊	389冊	390冊
文献コピー提供:	511件	992件	964件	1,014件	1,092件	846件	853件
図書の借用:	897冊	947冊	865冊	1,088冊	832冊	827冊	780冊
文献コピー取寄せ:	2,213件	2,229件	1,549件	1,491件	1,195件	1,095件	1,370件

<学内他キャンパス>

	平成19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
図書の貸出:	1,852冊	2,345冊	2,814冊	4,170冊	6,965冊	9,664冊	12,207冊
文献コピー提供:	410件	434件	340件	313件	324件	381件	401件
図書の借用:	3,481冊	3,989冊	4,083冊	5,706冊	11,479冊	16,231冊	18,898冊
文献コピー取寄せ:	1,367件	1,665件	1,229件	1,491件	1,247件	1,646件	1,857件



13

駒場図書館の現状(ガイダンス・講習会)

Guidance and Training Courses

●新入生ガイダンス

- ① 全新生生に対して、「新入生学部ガイダンス」の中で駒場図書館紹介を実施。
- ② 文系の必須授業「基礎演習」の授業内で「図書館ツアー+検索実習」を実施。
※平成26年度は開講55クラス中49クラス(うち検索実習のみが7クラス)が採用し、1,154名が受講。
- ③ PEAK(Programs in English at Komaba)新入生に対して、
10/3 学部ガイダンスの中で駒場図書館を紹介
10月前半 「基礎演習」の授業の中で、図書館ツアーと検索実習を実施予定

その他 授業の中での文献検索ガイダンス、データベース講習会等を年間15回実施。



所蔵資料の電子化・公開 Digital Collections

1. **大日本海志編纂資料**: 戦前、海軍省が『日本海志』を編纂するために収集した資料。戦後、本郷の東京帝国大学に運ばれ、さらに駒場の第一高等学校に移された。その後、駒場の図学教室(現、情報・図形科学部会)で研究用に管理されていた。平成21年度に駒場図書館へ移管されたのを機に、172点の電子化公開を行った。
2. **電子版「黒木文庫」**: 近世演劇と音楽の専門家として知られる黒木勘蔵氏(1882～1930)のコレクション(約2,900タイトル)。教養学部の国文・漢文学部会が管理。関連資料約430点を併せて、平成15年度～平成17年度に電子化公開を行った。
3. **スタニスラス・プチ『産業実務家』**: 第一高等学校時代に機械製図の教材として用いられた同書(126図120枚からなる図面集)の中から、現存している125図を平成20年度に電子化公開を行った。

1. **第一高等学校旧蔵「教育用掛図」**: 駒場図書館に引き継がれている「教育用掛図」(総計約200点)のうち、77点を電子化公開を行った。



竹本義太夫の切手 当館所蔵の肖像画を基にしている。背景は別の物。

国際化・グローバル化対応 Response to Internationalization/Globalization

●教養学部、総合文化研究科の留学生数(2014.5.1現在)

	総数	留学生内数(%)
前期課程	6,643	136 (2.0%)
後期課程	433	7 (1.6%)
大学院(修士)	565	80 (14.2%)
大学院(博士)	766	132 (17.2%)
研究生等	110	85 (77.3%)
合計	8,517	412 (4.8%)

- ・短期交換留学生(AIKOM)28名
※平成7(1995)年スタート
- ・PEAK(Programs in English at Komaba)
- ・国際人材養成プログラム(GSP), 国際環境学プログラム(GPES)
※平成24(2012)年スタート

●駒場キャンパスでの国際化対応

<組織> 駒場インターナショナルオフィス+留学生相談室+国際研究協力室+AIKOMオフィス
<行事> 「東大留学フェアGo! Global 2012」(2012.4.26～4.27 駒場キャンパスで開催)

●駒場図書館での国際化対応

- ・[平成元年度] BBCコーナーを設置
- ・平成4年度 「留学生図書コーナー」を設置。平成7年3月までに約2,000冊を配架
- ・平成14年度 CNNコーナーを追加設置
- ・平成22年度 館内サインの英文併記化完了
- ・平成23年度 PEAK学生用図書を500冊(3,000千円)整備。経費は教養学部から補填
- ・平成24年度 「留学生図書コーナー」と洋書コーナーを合体し、洋書コーナーを拡張
- ・平成25年度 海外新聞データベースLibrary PressDisplay導入にともない、総合図書館、柏図書館とともに大型タッチパネルディスプレイを導入

16

駒場図書館新館(Ⅱ期棟)計画

A Development Plan for a New Library Building

現在の駒場図書館東側への増築計画である。駒場図書館は、当初14,000㎡として構想され、第Ⅰ期として平成14年3月に8,600㎡が竣工した。

Ⅱ期棟の早期実現を目指し、毎年、概算要求も行っている。
平成20年度は付帯設備として自動化書庫(100万冊収蔵)を概算要求に追加。

平成21年度に、『教養学部60周年記念事業』の案件のひとつとして「駒場図書館新館計画」があげられ、寄付を呼びかけるパンフレットが作成された。

平成27年度概算要求では、総合的教育改革沿った内容を盛り込んだ。



17

東京大学附属図書館 柏図書館の現状と今後の課題

KASHIWA LIBRARY, THE UNIVERSITY OF TOKYO

CURRENT STATUS AND FUTURE ISSUES

25 August 2014

2

目次

I. 柏キャンパス

1. 東京大学の三極構造の一極
柏 I キャンパス (航空写真)

II. 柏図書館

1. 概要
2. 利用者 (キャンパス構成員)
新領域創成科学研究科の学生数推移

III. 東京大学柏図書館の使命

1. 図書館機能とコモンズ機能
2. 図書館機能として (館内写真)
3. コモンズ機能として (館内写真)

IV. 今後の課題

Table of Contents

I. Kashiwa Campus

1. One of three main campuses
Kashiwa I Campus (aerial)

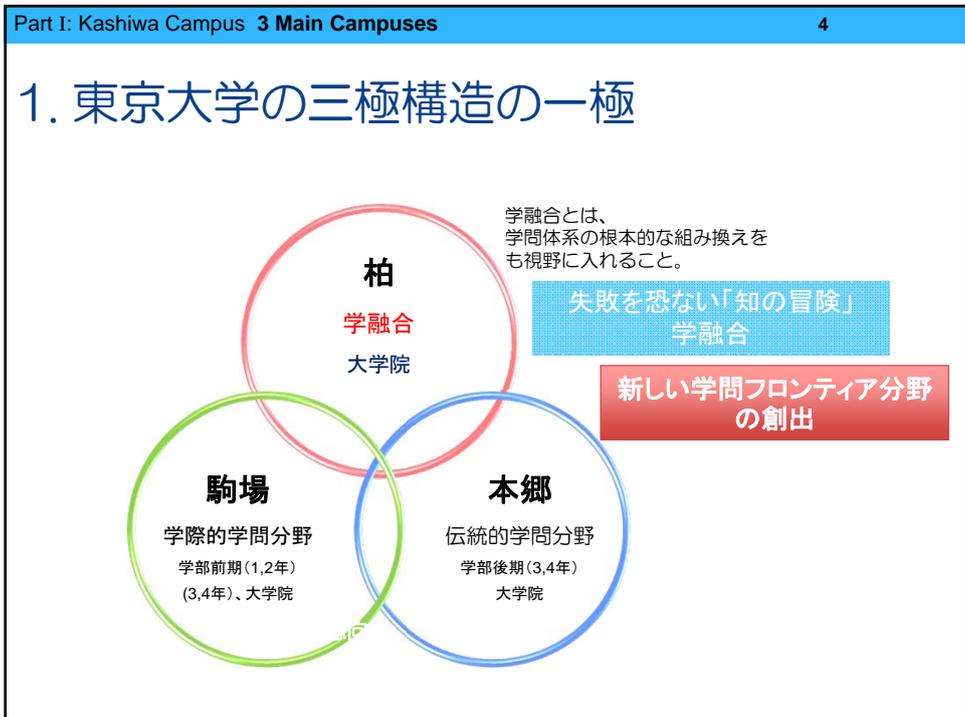
II. Kashiwa Library

1. Overview: facilities, services
2. Users by Campus Unit Affiliation
Student User Trends

III. Kashiwa Library's Mission

1. Library & Commons functions
2. Library Photo Tour
3. Commons Photo Tour

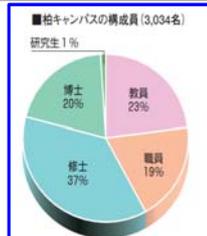
IV. Future issues



東大3拠点図書館



東京大学柏 I キャンパス 自然科学の研究拠点



- ・修士・博士の学生が多い 約60%
- ・留学生の人数と割合の多さ
現在 約230名
在籍者の 17%
- ・外国人研究者・家族の多い雰囲気

1. 概要 施設・資料・サービス統計



建物

開館：2005年2月22日
 規模：延床面積：1階：3,059㎡
 2階：1,937㎡
 閲覧室：45m×27m(天井高：4.8m)
 設備：座席数：243席
 収蔵能力：開架：約10万冊、
 自動書庫：約100万冊
 セミナー室2、ラーニングサポート室、
 メディアホールを併設

資料

開架：約 55,000冊
 教職員、学生のための一般書、専門書
 海外研究員家族のためのDVDも提供
 自動化書庫：約340,000冊

職員

常勤：課長1、係長2、係員2、非常勤1
 (夜間閲覧は除く)

開館日数(土曜日を含む) 271日

貸出数 約33,000冊

相互利用 依頼 複写 約340件
 現物貸借 約2,600件
 受付 複写 1,600件
 現物貸借 6,000件

利用者(柏キャンパス構成員) 約3,200名
 大学院学生が約60%

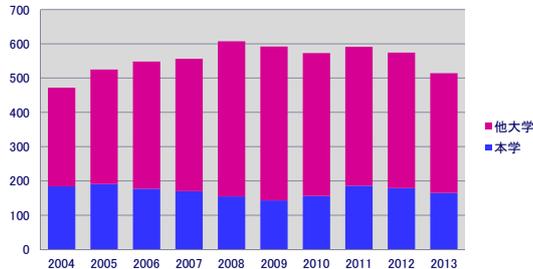
2. 利用者 (柏キャンパス構成員)

区 分	教職員数(人)													大学院学生・研究生数(人)							
	教員・研究員			技術職員			事務職員			計			修士		博士		研究生		計		
	教員	特定期	(特定)短時間勤務	職員	特定期	(特定)短時間勤務	職員	特定期	(特定)短時間勤務	教職員	特定期	(特定)短時間勤務	新領域学生数(外数)	新領域学生数(外数)	新領域学生数(外数)	新領域学生数(外数)	計				
新領域創成科学研究科	177	87	57	0	0	64	21	18	116	198	105	237	540	895		517		32	1,444		
宇宙線研究所	37	24	0	8	0	21	8	1	20	53	25	41	119	27	0	16	0	1	0	44	0
物性研究所	82	49	6	32	0	19	12	4	49	126	53	74	253	56	38	30	16	0	0	86	54
大気海洋研究所	63	53	16	13	0	47	18	5	46	94	58	109	261	49	20	65	19	3	1	117	40
人工物工学研究センター	7	2	3	0	0	4	0	1	5	7	3	12	22	20	0	8	0	1	0	29	0
空間情報科学研究センター	11	6	11	0	0	2	0	0	3	11	6	16	33	11	26	6	15	2	0	19	41
環境安全研究センター-柏支所	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	3								
情報基盤センター	2	1	0	2	0	0	0	1	1	4	2	1	7								
国際研究科カブシキ会館宇宙研究棟	3	74	2	0	0	2	9	13	11	12	87	15	114								
高齢社会総合研究機構	1	12	1	0	0	0	0	1	9	1	13	10	24								
フューチャーセンター推進機構	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	3								
柏保健センター	0	0	0	3	0	0	1	0	0	4	0	0	4								
国際センター-柏オフィス	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	2	1								
柏図書館	0	0	0	0	0	0	7	0	1	7	0	1	8								
柏地区研究センター-支援室	0	0	0	0	0	0	4	0	4	4	0	4	8								
柏地区共通事務センター	0	0	3	0	0	4	25	1	16	25	1	23	49								
合 計	385	310	99	58	0	163	105	47	284	548	357	546	1,451	1,058	642	39	1,739				

*平成25年5月1日現在
 *特定期、(特定)短時間勤務者を含む

新領域創成科学研究科の学生数推移

修士課程合格者数

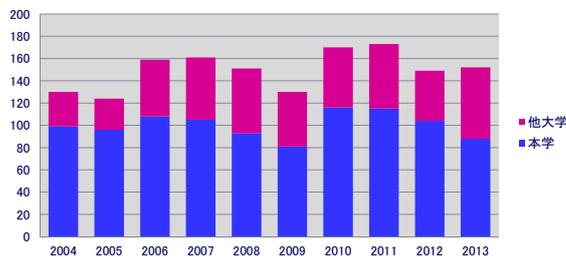


本郷キャンパスに比べ、
他大学学生の比率が多い。
外国人留学生の比率も多い。



特徴: 流動性・多様性のある学生
欠点: 英語力・教養力の不足

博士課程合格者数



1. 図書館機能とコモンズ機能

図書館機能

コモンズ機能

- ① 柏キャンパスの拠点図書館 (東大三極構造の一極)
- ② 新領域創成科学研究科のホームライブラリー
- ③ 全学の自然科学系学術雑誌の保存図書館
- ④ 電子ファイルによるドキュメントデリバリー
- ⑤ 図書館資料の公開による地域貢献

図書館機能: 柏図書館2階

- ① 柏キャンパスの拠点図書館 (東大三極構造の一極)
- ② 新領域創成科学研究科のホームライブラリー
- ④ 電子ファイルによるドキュメントデリバリー
- ⑤ 図書館資料の公開による地域貢献

図書館機能: 自動化書庫

- ③ 全学の自然科学系学術雑誌の保存図書館

コモンズ機能: 柏図書館1~2階

- ① 柏キャンパスの拠点図書館 (東大三極構造の一極)
- ⑤ 図書館資料の公開による地域貢献



2. 図書館機能として

① 柏キャンパスの拠点図書館 (東大三極構造の一極)

- 学習用図書の収集・貸出

② 新領域創成科学研究科の ホームライブラリー

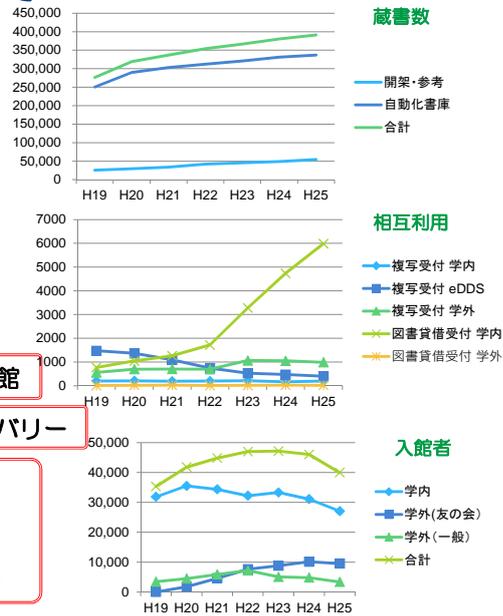
- シラバス掲載図書の収集・提供
- 学位論文収集・保存・公開
- 柏図書館ライブラリーツアー
- 論文執筆のためのサポートガイダンス

③ 全学の自然科学系学術雑誌の保存図書館

④ 電子ファイルによるドキュメントデリバリー

⑤ 図書館資料の公開による地域貢献

- 柏図書館友の会 (会員数：個人360人)
- 東葛テクノプラザ (中小企業) の賛助会員
- 市民の図書館利用は、入館者全体の約30%



2F サービスカウンター

ここを起点に、

- ・ 柏キャンパス構成員
- ・ 柏図書館友の会会員
- ・ 一般市民の方々に
図書館サービスを行う



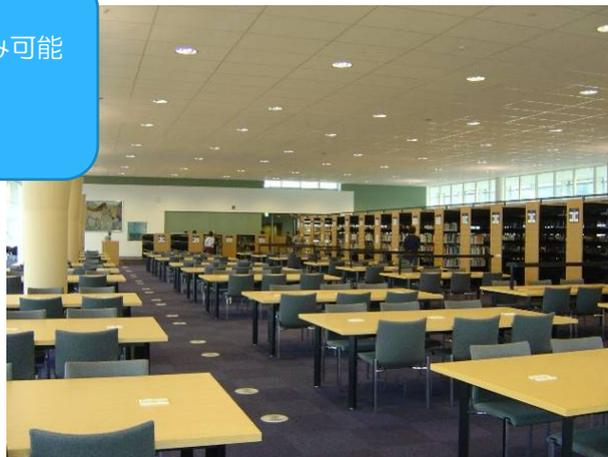
2F 情報検索コーナー



- 東京大学が提供する
- 東京大学OPAC
 - 電子リソース等が利用できる。

2F 閲覧室

- 243席のすべてに
- ノートPCの持ち込み可能
- 電源コンセント有り
- 情報コンセント有り
- 無線LANが利用可能



2F 閲覧個室



- 7席すべての席に
- ノートPCの持ち込み可能
- 電源コンセント有り
- 情報コンセント有り
- 無線LAN利用可能

3. コモンズ機能として

① 柏キャンパスの拠点図書館（東大三極構造の一極）

② 新領域創成科学研究科のホームライブラリー

■ アカデミックコモンズ

- ◆ 会場提供（大学院授業、セミナー、シンポジウム、講演会、教授会（新領域、専攻）、語学研修（柏IOオフィス、人事課）
- ◆ ラーニングサポート（ECCS分散端末設置、ガイダンス、データベース等講習会、ECCS利用者ID/PWの代行発行：600名、無線LAN）

■ キャンパスアメニティ

- ◆ 健康診断 ◆ スポーツプログラム（ヨガ、ピラティス）
- ◆ 音楽会（2～3回/年） ◆ 上映会（2～3回/年）
- ◆ サイエンスカフェ（5～6回/年）
- ◆ 柏ブックレビューLIVE!（1回/年）
- ◆ アメニティ資料の提供（DVD、一般雑誌、新聞）



⑤ 図書館資料の公開による地域貢献

- ◆ イベントへの招待（サイエンスカフェ、音楽コンサート、上映会など）
- ◆ イベントテーマにあわせた資料展示
- ◆ 柏市立図書館や市内大学図書館と連携した「合同図書展示」「ビブリオバトル」の開催
- ◆ 柏キャンパス一般公開メイン受付、市民学習会等への会場提供
- ◆ 東葛テクノプラザとの連携

1Fの施設

(アカデミックcommons、キャンパスアメニティ)

- メディアホール
 - コンファレンスルーム
 - セミナー室1、2
- 授業、セミナー、教授会等
各種行事に利用。



メディアホール



コンファレンスルーム



コミュニティサロン



メディアプロムナード

- コミュニティサロン
 - メディアプロムナード
- サイエンスカフェ、
ポスターセッション等に
利用。



- ラーニングサポートサービス
 - レストコーナー
- データベース講習会、グループ学習等
に利用。
レストコーナーは、憩いの場。



ラーニングサポート
サービス



レストコーナー

自動化書庫 100万冊 収蔵規模

の書庫に自然科学系雑誌のバックナンバー
を収納して
おり、この
資料を用い
たe-DDS
サービスが
行われてい
ます。



■ 自動化書庫外観



■ 自動化書庫内部
(スタッカークレーン)



■ ラック

資料を取めたコンテナを
効率よく収めます。

自動化書庫



■ 自動化書庫内部
(垂直搬送機)



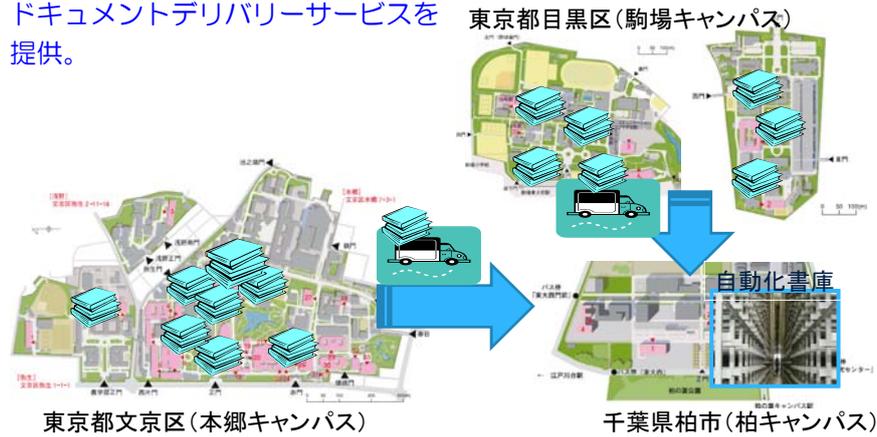
■ 出納ステーション

自動化書庫から数分で資料が取り出され、返
却も自動的に行われます。

雑誌約34万冊を収蔵
(2014.4現在)

自然系学術雑誌の集中保存と提供

- 全学の図書館・室から
 - 毎年、計画的に資料を受入れ
 - 電子ファイルによる
- ドキュメントデリバリーサービスを提供。



IV. 今後の課題

柏図書館の使命を継続的に発展させるために、
 ~東京大学の情報インフラ整備の拠点~

【図書館教育支援システムの充実】

- シラバス掲載図書、参考図書、関連専門書の網羅的収集(e-Book等)。
- 教育の質向上のため、デジタル講義システムを支援
- 東京大学のデジタルアーカイブ、東京大学学術機関リポジトリ等のバックアップ拠点を整備

【国際図書館機能の充実】

- 自然科学系の外国語の教科書や専門書等をe-Bookで重点的に収集
- 研究資源情報として研究・教育に活用し、保存・発信するためメディア・センター(仮)を新設

【柏図書館保存書庫等の整備】

- 100万冊収容の自動化書庫を増築・増設
- 文書、地図、写真、フィルム等研究資料形態にあった保存書庫を新設
- 文書館機能を持つ施設と資料の利用に関する運用面の支援・協力を検討

- ① 東大三極構造の一極
- ② ホームライブラリー
- ③ 保存図書館
- ④ ドキュメントデリバリー
- ⑤ 地域貢献

地域、他機関とのゆるやかなネットワーク



(3) 平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価実施要領

1. 目的

大学及び国内外の学術情報基盤の充実に貢献する役割を有する附属図書館の学習支援機能、研究支援機能、保存・情報発信機能等の諸活動について、学外有識者等による評価を実施し、附属図書館の諸機能の改善・向上に資する。

2. 実施方法

外部評価は、次の方法により実施する。

- (1) 附属図書館の自己点検評価報告書及び関係資料に基づく評価
- (2) 附属図書館の諸活動に関するヒアリングによる調査
- (3) 実地視察による評価

3. 外部評価項目

外部評価項目は、次のとおりとする。

- (1) 学習支援機能：学習環境の整備
- (2) 研究支援機能：学術情報基盤の整備
- (3) 保存・情報発信機能：資料の保存と研究成果の発信
- (4) 社会貢献・社会連携
- (5) 組織・運営

4. 外部評価委員

外部評価委員は、国立大学法人・公私立大学の図書館関係者、図書館・情報学関係者及び海外の大学図書館関係者から数名に委嘱する。

5. 外部評価日程

外部評価は、次の日程により実施する。

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| (1) 委員への委嘱 | 平成 26 年 4 月 |
| (2) 委員への事前資料配付 | 平成 26 年 6 月 |
| (3) 外部評価委員会（ヒアリング及び実地視察） | 平成 26 年 7 月または 8 月 |
| (4) 評価結果の提出 | 平成 26 年 9 月 |
| (5) 外部評価報告書作成 | 平成 26 年 12 月 |

4. 平成 25 年度東京大学附属図書館自己点検評価報告書(平成 19 年度～24 年度) 要約

本報告書は、平成 19 (2007) 年度から平成 24 (2012) 年度の 6 年間における東京大学附属図書館の点検評価をまとめたものである。これ以前の自己点検評価にあたるものは、平成 5 (1993) 年度にまとめられた「東京大学附属図書館報告 一ひろがりつつながりー」であり、今回は 20 年ぶりの自己点検評価になる。

この報告書は、「はじめに」と全 5 部で構成されている。「はじめに」では、今回の自己点検評価を行うにあたっての基本的な視点を述べ、第 1 部では、今回の自己点検評価にいたるまでの経緯をまとめている。第 2 部では、附属図書館の活動概況を五つのカテゴリーに分けて記述し、第 3 部で、カテゴリーごとに分析・評価を行っている。第 4 部では、全体をまとめるとともに、今後の課題をあげている。第 5 部には、用語解説、利用者アンケート結果、統計などの資料をまとめている。

はじめに

「はじめに」では、評価対象期間中に東京大学附属図書館が取り組んできた諸課題をあげた上で、この間の主な達成をふりかえり、「共働する一つのシステム」という新しい理念が図書館内部での達成にとどまっている面が強く、残された課題の解決については新図書館計画の実施にその多くが託されているとしている。

第 1 部 これまでの経緯

第 1 部では、附属図書館の組織原理の変遷をたどり、現在は、岸本改革によって掲げられた「連絡調整された分散主義」から「共働する一つのシステム」への変遷の時期にあるとの認識をしめした。また、附属図書館のミッションとして、「東京大学憲章」および「東京大学図書館憲章」を参照して附属図書館の活動の原点を確認している。さらに、これまで設定されてきた附属図書館の目標や報告書について概略をしめして、今回の点検評価の基礎となる資料を確認した。

第 2 部 附属図書館の活動：平成 19 年度から 24 年度の概況

第 2 部では、附属図書館の活動について、1 学習支援機能：学習環境の整備、2 研究支援機能：学術情報基盤の整備、3 保存・情報発信機能：資料の保存と研究成果の発信、4 社会貢献・社会連携、5 組織・運営の五つのカテゴリー別に概況を記述した。また、6 利用者アンケートとして、本学の学生の利用状況とサービスへの満足度を把握するために平成 25 (2013) 年 10 月に実施したウェブでのアンケート結果の概要を紹介している。

第 3 部 附属図書館の評価

第 3 部では、第 2 部で記述した附属図書館の活動概況をもとにして、附属図書館活動の

分析・評価を行った。

学習支援機能では、開館時間の拡大・延長，入館者数，図書の貸出数，学習用図書の整備・充実，資料の取り寄せ，レファレンスサービスおよび情報リテラシー教育を点検評価の項目とした。全体的に学習環境の整備やサービスの拡大・充実は進められていることを評価し，今後は，本学における「学部教育の総合的改革」の動向を踏まえながら，学習支援活動を改善・充実していくことを課題としてあげている。

研究支援機能では，全学共通経費による基盤的学術雑誌などの整備，大型コレクションおよび電子リソースの整備について評価を行った。全学共通経費の制度を確立したこと，それをもとにして大型コレクション，電子リソースの整備が全学的な視点から進められたことを高く評価する一方で，これからの課題として財源の問題に取り組むべきことを提起している。

保存・情報発信機能では，蔵書・コレクションの整備，所蔵資料の電子化，目録データの遡及入力事業，雑誌の移管，そして機関リポジトリについて評価した。蔵書の充実や目録データの遡及入力は順調に進められていることを評価し，雑誌の移管に関しては柏図書館の自動化書庫の運用の実績を踏まえて，さらに保存機能を充実していくことをもめている。また，資料の電子化，機関リポジトリによる研究成果の発信については，十分に展開しているとは言えないとの評価がなされた。

社会貢献・社会連携では，オープンキャンパスや一般公開，催し物，友の会の活動，他大学との連携・協力の状況について分析され，従来の展示会に加えて新たにさまざまな企画や行事を行ってはいるが，附属図書館全体としての組織的な展開が不足していることが指摘されている。

組織・運営では，附属図書館の組織と職員を分析して，図書館機能の高度化を進めるためには組織や職員の配置について改善の余地があると評価し，予算・経費については全学共通経費制度の意義を高く評価しながらも，資料の値上げや為替変動への対応をはかる必要性があると指摘している。全学資料購入集中処理および図書資産の実査に関しては，その意義を評価し，さらなる改善が課題だとしている。また，施設整備については省エネルギーと快適な利用環境の確保との間でバランスをとりながら進めていくべきと指摘している。

第4部 まとめと今後の課題

第4部では，報告書の概要をまとめた上で，「共働する一つのシステム」に向けての歩みが進まない要因を分析し，電子的リソースへの対応，物理的な資料の保存と「場所」としての図書館の重視などのサービス面の充実，組織や予算などの制度面での改善が必要であると指摘している。そして，全学的な事業として進められている新図書館構想がこれらの課題を解決する契機となるだろうと結論づけて，報告書を締めくくっている。

平成 26 年度東京大学附属図書館外部評価報告書

平成 26 年 12 月

編集・発行 東京大学附属図書館

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

TEL 03-5841-2612

URL: <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp>